

環境問題から考えること

現代文明はいま二つの危機に直面している。地球温暖化と新型コロナウイルス感染症である。

地球温暖化は科学技術文明がもたらした気候変動の一つとして捉えられる。温暖化の真偽の検討が続けられてきたが、2021年8月9日にICPP（国連気候変動に関する政府間パネル）は地球温暖化およびそれが人間営為によるものであることを公式に表明した。研究者の間では依然としてこれが人間営為によるものかどうか議論はあるが、2019年頃から懸念されてきた大西洋南北熱塩循環（AMOC）の停滞、2021年のグリーンランド高地での観測史上初の降雨（CNN、8月19日）といった報告を考えれば、地球温暖化そのものは認めざるを得ないし、事態は我々が考える以上に深刻かもしれない。科学技術を手にした人間が求めた comfort は自然を犠牲にした「成果」であったという見方もできるだろう。問題はそれが不可逆の変化に見えること、そしてそれがそのまま人間生活に代償として返ってくることである。

他方、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は人類を地球規模でのパンデミックへと引き込んでいる。これは人間が未知のウイルスに遭遇した構図として捉えられるが、その一方で、「人間が自然に接近し過ぎた」結果であるという見方もある。自然には人智が到底及ばない領域があるのに、人間活動の展開が無意識にあるいは無防備にそうした領域に踏み込んでしまったという主張である。いずれにしても、このウイルスは生命の安全確保と経済活動の継続という両極の選択を人間に迫っている。自然の未知なる領域にふれた際の対処こそが重要であるが、科学技術が果たしてこの未知を解明し制御し得るかは未だ不透明である。こうした脅威は他にもすでに存在する。2016年のロシアでは地球温暖化によって融けだした永久凍土中のトナカイの死骸から炭疽菌の感染が広がり、また、その他の未知のウイルスの懸念があることが報告されている（Sputnic（2020））。これに類する事態は今後も起こり得ることが懸念されるが、その根底にも地球温暖化があることはいうまでもない。

人間と自然との関係では、しばしば科学技術が問題にされる。より正確には、科学の知と技術の力を人間がどのように用いるのかという問題である。ニュートンやデカルトに代表される近代科学の知は、やがて技術へと展開されて産業革命をもたらし、人間にとてつもなく大きな力を与えた。20世紀には近代の科学と技術は一度ならず批判されたが、近年の情報技術の進展とともに再び両者が多くの問題を解決に導いてくれるという楽観的な意識が広がっている。民間人による宇宙への旅はすでに30年ほど前に実現しているが、2021年は民間人だけでの宇宙飛行も行われ、まさに宇宙旅行時代の幕あけとも感じられた。まるで人類が深海から宇宙までをわが領域におさめようとしているかのごとくである。しかし、そうした自信は過信に陥ることもある——福島第一原発事故を見れば、人間の叡智が自然の力の前に脆くも崩れ落ちるのがわかる。近代科学がもたらした因果律を基礎とする実証主義は、あたかも人間が自然を解明できると感じさせた。しかしそれが大きな自然のごく一部に過ぎないことは、複雑系の科学がすでに明らかにしている。

環境問題を捉える視点も同様である。地球温暖化の度合いを測り、自然災害を予知し、コロナウイルスに対抗するワクチンや治療薬を開発する。これらは人類の叡智を結集させた科学技術の成果である。その点で人間は自らの“進歩”を誇ってもよい。CO₂排出をどの程度削減すれば地

球の気温上昇をどの程度おさえられるか、まさに科学の叡智の成果である。しかし、環境問題とは物理的自然に対して科学的に対処することだけではない。人間が共同体をつくって生活をおくるところには生業（なりわい）——自らの生を営むこと——があり、社会や文化が形成される。したがって、物理的な自然に社会や文化が付与された空間の全体こそが個人あるいは個人が住まう共同体にとっての環境なのである。

2021年12月に文明研究所はシンポジウム「環境と文明」を開催した。これは文明研究所が続けてきた国際集会「文明間対話」のサテライト・シンポジウムであった（詳細は本稿の特集を参照）。テーマ自体は広く漠然とする感があったが、最終的に描き出したのは人間の知——個人や集団の経験知——の再認識であった。人間は自らが属する共同体のなかで自然と対峙しながら生を営んできたのであり、そこにはすでに自然に対して育まれた知が存在するというのである。

フランスのクロード・ベルナール（Claude Bernard：1813 - 1878）は身体における内的環境（milieu intérieur）なる概念を導入し、身体のある器官がそれを取り囲む体液などの「内部の環境」によって外部から保護されることを提示した。これは後に W. B. キャンノン（W.B.Cannon: 1871-1945）によって「ホメオスタシス」（homeostasis：生命体が外的な影響に対して内的な生理状態の恒常性を保つこと）へと展開される。ベルナールの発想は、生命体における器官の存在と同時に、その内的環境が同じ生命体内で相互関係を形成することを示唆するが、結果として生命体がそうした有機的な全体を構成するとして理解される。他方、エストニア出身のドイツの生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュル（Jakob Johann Baron von Uexküll, 1864年 -1944年）は動物界に「環世界」（Umwelt）なる概念を導入する。動物のそれぞれは自身が知覚し活動する世界を環境としてもつとし、それを「環世界」と称する。したがって、動物のそれぞれの種にとって、その種自らが主体として認識した外界だけが環境すなわち「環世界」を構成することになる。言い換えると、種の認識を外れてあらかじめ存在する客観的現実が存在しない、ということになる。この考え方は、ある意味では動物のそれぞれに備わった生きるための生理的組織と感覚・運動器官が自らの環世界をつくるという点で興味深い。また、多少広い視点から考えれば、ある生物体にとっての環境が物理的世界としてだけではなく、むしろその種の生への意志によって構成されるという点で、自然科学を超えた理解を促すことになる。

これらの概念は生物学の世界での話であるが、多少の強引さは覚悟のうえで人間と自然環境の関係として考えることはできないであろうか。人間にとっての環境は、人間が自らの生のなかで対峙している自然——すなわち人間が目で見え耳で聞き、肌でふれている自然である。原始の自然は、人間との関係性のなかで環境となるのである。逆に考えれば、人間にとっての環境としての自然は、本来は人間の生との関りのなかで存在し、人間の生を保持し、人間の生業を成立させてきたのである。人間の活動はそうした環境——ベルナールのいう内的環境——として人間の活動を保証してきた。そして、その環境は人間自身の認識のうえに存在するものであり、ユクスキュルのいう人間の「環世界」を形成し、そこには人間の生への意識や欲求が反映される。人間が共同体として形成してきた社会の意志や文化も含めた環境となるのである。人間と自然は、そうした環境と人間営為のバランスのうえに共存をはかってきたと考えることができる。そしてそのバランスをはかってきたのが人間の知——土着の知（indigenous knowledge）である経験知——ではなかったか。

科学技術はともすると人間に期待を抱かせる。人間が自然のなかで自らの環境を上げられると

いう過信に満ちた期待である。そして、人間に「本来」の生の意識を拡張させる。このとき、過度の拡張は結果として人間と自然とのバランスを失わせ、内部環境は保護の役割を果たさず、環世界は外界からの揺り戻しを受けることになる。これは科学技術の問題ではない。科学技術の使い方の問題なのである。現代の環境問題を引き起こした原因の一つがそこに見出される。

かつて中村雄二郎は、現代文明の知を「科学の知」——西欧における科学革命がもたらした近代科学精神によって規定されてきた知——と称し、それが普遍主義、論理主義、客観主義によって構成されるとして、その知が限界を迎えていることに警鐘を鳴らした。「科学の知」が客体としての自然を客観視するがあまり、主体である人間と客体である自然の相互作用を失わせてしまったというのである。さらに中村は、今日の人間にとって必要とされるのが「パトスの知」（「臨床の知」）であると続ける。中村は、人間と自然が有機的な関連性を備えた空間としてのコスモロジーのなかで、自己の行為が常に他者からの批判を受けているという意識を備えた知として「パトスの知」を位置づけている。人間が能動的に自然を観察し、還元主義で自然を分解してそれを画一的に理解するというある意味で傲慢な科学の知に対し、人間は自然から見られている対象であること、逆に人間は自然から見せられた自然しか理解し得ないという受動的な知こそが求められることとなる。

中村のいう「パトスの知」は、まさに地域に根差した土着の知が果たしてきた姿ではないだろうか。確かに人間は現代科学技術から物質的豊かさや精神的な comfort を享受してきた。それは間違いないし、否定されるべきことではない。しかし、それは「見せられている」自然のなかで許容されることであり、欲望を際限なく拡げて無理やり自然の壁をこじ開けてあけることではない。人間は自らの生業の保証を自然に求めてきた。それは与えられた環境という自然のなかで自らが手にした知——地域に根差した経験知や暗黙知——のなかでの人間営為であり、そこに人間存在の契機が認められる。そして、そうした地域の知を尊重し合いながら連関させるところに、環境に対して人類が共有し得る集合的な知が存在するのではないか。科学技術はそのために活用されなければならない。そこに現代の叡智が結集されることが期待される。「文明学」もまたそうした叡智の結集の営みでありたいものである。

東海大学文明研究所員
東海大学文学部文明学科
平野葉一

東海大学文明研究所員
東海大学スチューデントアチーブメントセンター
田中彰吾